

世界の切手と牛切手〔紋章切手〕

切手を利用した郵便制度を最初に開始したのはイギリスであり、1840年に発行された記念すべき最初の切手には当時の国家元首であったヴィクトリア女王の肖像が用いられていました。印刷されたインクの色をとり、1ペンス切手はペンス・ブラック、2ペンス切手はペンス・ブルーと呼ばれています。貨幣を発行し、流通させることが地域の主権と関わることと同様に、それ以降は主権を主張する国家や地域から切手が発行されることとなります。

そして、世界で2番目、1843年にブラジルで発行された切手は、直接牛を描いたものではないものの、そのデザインの楕円形がウシの目のように見えることからブルズ・アイ（雄牛の目）という愛称で呼ばれています。ウシなど草食動物の瞳孔は、視野を広くするために横長になっており、確かにそのように見えなくもありません。初版のブルズ・アイに国名は記されておらず、額面は30旧リアル、60旧リアル、90旧リアルでした。一方、ブラジルの郵政施行100年を記念して発行された1943年の復刻版では、現在の国際郵便の取り決めによりBRASILの国名が表記され、額面は現リアルの補助通貨単位であるセンターボとなっています。現在、ブラジルはアメリカに次ぐ世界第2位の牛肉生産国ですが、切手の世界でも重要な位置を占めているといえます。

世界最小として知られている切手にもウシがデザインされています。北ドイツ地方にあったメクレンブルク・シュバリーン大公国から1856年に発行されたもので、11.5mm×11.5mmの切手です。4枚一組の1シリング切手として使用されましたが、これを切り離して1/4シリング切手として使用することもできました。ただし、切り離した切手1枚では郵送に用いるには額面が足りず、単独ではなく加貼用として用いられたようです。国ではなく、地域で発行されたローカル切手ではこれよりも小さなものがあるようですが実に160年以上もの間、世界最小の切手であるということは驚きです。切手の役割は、郵便物の料金をすでに支払ったことを郵便局に示すことにあるため、これ以上小さいと確認しにくい、紛失しやすいなどの不都合があるのでしょう。

また、この切手は世界で最初の牛切手でもあります。当初、切手は国内で流通するものであったため、国家の元首や紋章などが図案とされました。ヨーロッパでウシを紋章に用いている例は多く、特別視されていたことがわかります。アルファベットの最初の文字であるAがセム語のアレフ（ウシの頭）を意味する言葉の頭文字であったことや、家畜牛を意味するキャトル（Cattle）という単語が、資本を意味するキャピタル（Capital）と同一の単語である、ラテン語のカプタリス（Capitalis）を基としていることなどは、そのことを裏付けているといえるでしょう。

ウシの紋章がデザインされた切手で、もう一つ有名な話題といえば、オードリー・ヘプバーン主演のシャレード（1963 年公開）という映画で用いられた、からくりがあげられます。25 万ドルもの金塊を隠すため、非常に高価な切手 3 枚に換えて保管したというもので、そのうち最も高価な 1 枚とされたのがモルドバの 82 パラ切手です。もちろん映画で登場した切手は架空のものですが、10 万ドルと評価されており、当時の相場レート（固定相場で 360 円/ドル）を考えると、日本円では 3,600 万円にもなります。この切手の元切手は、1858 年発行のモルドバの 81 パラ切手です。元切手自体も世界にわずかしかな存在しない貴重なもので、実際に非常に高価な切手だそうです。

なお、この 81 パラ切手と 27 パラ切手は、モルドバで最初に発行された切手だったこともあり、オードリー・ヘプバーンの映画に採用されて人気となったからという理由も手伝ってか、切手自体をデザインに用いた切手が、郵政施行 75 年、100 年、140 年と数回にわたって発行されています。